

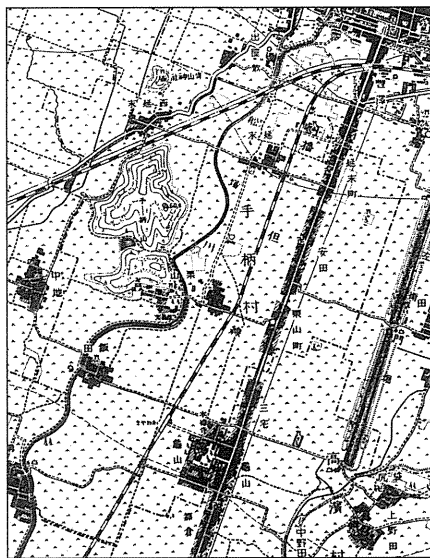


『手柄校区』をたずねて

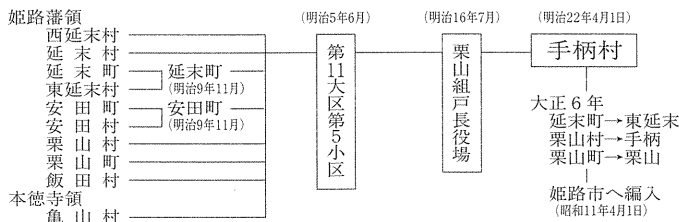
手柄校区域 姫路市のほぼ中央に位置し、手柄山の南東に広がる地域。手柄山の東を船場川が流れ、産業道路と飾磨街道、駅南大路が並行している。東部に姫路市役所を擁し、校区全体に多くの市の施設が散在している。面積264.4haの心臓形の区域に、世帯数4,369、人口10,485人。(平成12年9月現在)

校区九町の名称 延末(のぶすえ)、西延末、東延末、安田、安田四丁目、手柄、栗山町、飯田、亀山の九町。地元の年配者によれば、延末は「のぼっせ」、飯田は「いだ」、栗山は「くっりゃま」との発音を聞く時がある。亀山には「たや」(「田家」：荘園関連の地名か)という別称がある。飾磨街道筋の「飾磨区亀山」とは別区域。安田四丁目は、安田とは自治会を異にしている。昭和18年頃から形成された住宅街で、「東安田」と呼ばれていたが、昭和55年の姫路市役所の駅南への移転にともなって、現在の呼称となった。

飾磨郡伊和里 伊和族(出雲系)が、宍粟から、現在の手柄、荒川校区(今宿方面及び姫山周辺も含むか)へ南進して、飾磨郡伊和里と呼ばれた。『播磨国風土記』には、十四の丘の名と由来が紹介されている。田圃の区画や道筋の方向に、条里制の名残りをとどめる古くから拓けた土地である。のち、伊和郷(伊和郷)となり、さらに、岩東郷と岩西郷(現荒川校区)に分かれた。手柄校区は、この岩東郷にあたる。中世は国衙領であったもよう。江戸時代は飾西郡に属した。飾東郡に接する、飾西郡東辺の地である。明治29年になって再び飾磨郡に属す。町名の変遷 飾磨街道の成立(戦国時代末期か?)後、本村から分かれて、町場として成立したのが、今の栗山、安田、東延末であろう。この三町は、飾万津二十町のうちに数えられ、町奉行の支配下にあった。古代の「手苧村」の称が廃れてより、永らく「手柄」という集落名は無かった。明治22年の、手柄村誕生後も、「手柄」という大字名は無かったが、大正6年(1917)に、各大字から町村名を廃止する際、栗山村を「手柄」とし、街道筋の栗山町を「栗山」とし、延末町を「東延末」に改めた。亀山村は江戸時代には、亀山本徳寺の寺領であった。大名領でないため、赤穂義士の繋累で身を寄せる者が多かった。行政区画の変遷は次の通り。



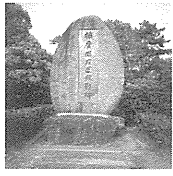
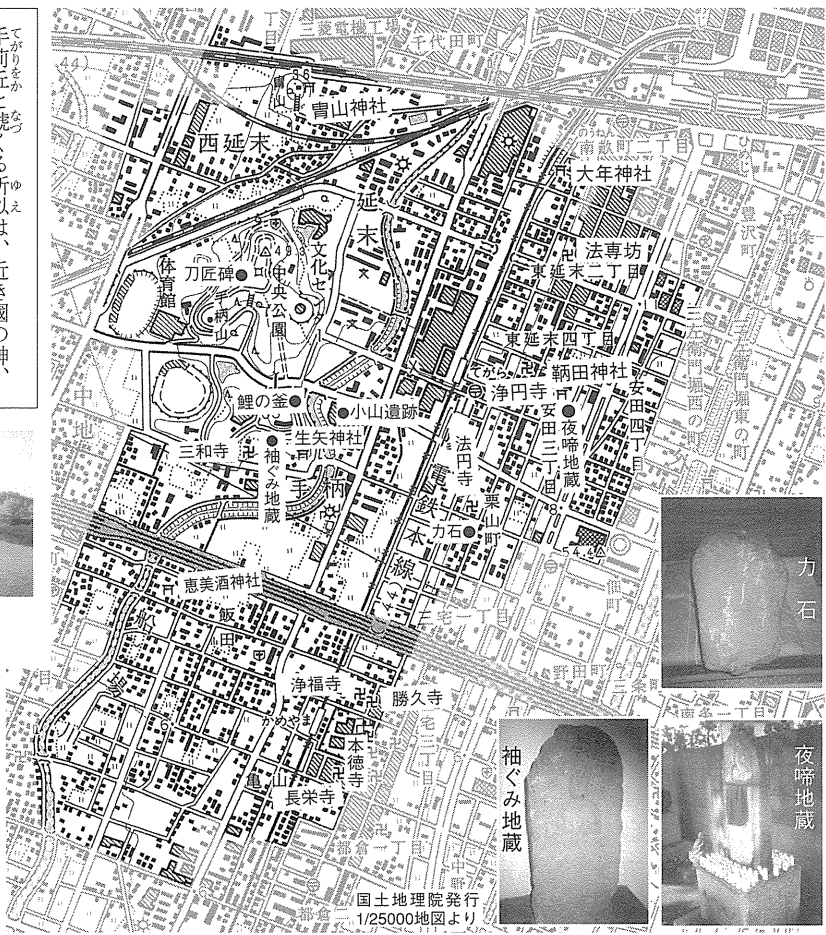
明治36年頃の手柄校区 (姫路市史第12巻付図4より)

明治時代末期の手柄山と船場川
(高輪文庫を活かす会編「明治・大正・昭和 姫路の絵はがき」より)

手柄村の歩み 明治22年(1889)の市町村制施行に際して、「手柄村」が発足。村名は手柄山にちなんだもの。村域は、現在の手柄校区と同じ。初代村長は、藩政時代に大庄屋を務めた飯塚六朗氏(飯田)。村役場は、栗山町に置かれた。やがて、名村長田中泰造氏(延末)の登場を得て、手柄村は「一村一家の風あり。」と評された。田中氏は、明治44年から昭和11年に至る25年間の長きにわたって村長の職に在った。手柄村は、昭和11年3月に解村して、4月に姫路市に編入された。同時期に荒川村、安室村が合併している。姫路市と近隣の町村の合併としては、戦前の最後のものである。

手刈丘と號する所以は、近き國の神、
 此處に到り、手以て草を刈りて、
 食薦と爲しき。故、手刈と號く。
 一ひといへらく、韓人等始めて來たり
 し時、鎌を用ゐることを識らず、
 但、手以て稲を刈りき。故、手刈の村
 といふ。

〔岩波書店刊
 日本古典文学大系「風土記」より〕



刀匠碑



鯉の釜

手柄山 標高49.3m。南丘と北丘より成り、三和山とも言う(南丘のみか)。『播磨國風土記』の「手刈丘」。大永年間には、三和外記次郎(三輪法泉)なる人物が手柄山構居を置いた。江戸時代に刀鍛冶が居住し、作刀した。とくに著名な刀匠は「手柄山氏繁」である。「播磨國刀匠顕彰碑」が北丘に立っている。寛延一揆の際には、山麓に一揆勢約四百人が集まった。明治の頃から行楽の場となり、戦後には姫路市の中央公園として、多くのレジャー施設が設置されている。

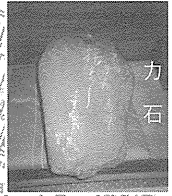
鯉の釜(延末) 船場川が手柄山南丘に突き当たって、大きく淵を作っている所。鯉が多く泳いでいたのでこの名がある。戦前までは、子供達が泳いだり、水遊びをしたと言う。古くから蛍が多いので名高く、「蛍沢」とも言う。また、「姫が淵」とも言う。近くにあった「むらがり池」で、赤松晴政も蛍狩り。

小山遺跡(延末) 手柄山の中央公園の東、船場川の左岸に広がる遺跡。昔は、その名の通り、小さな丘があったと言う。昭和39年に発掘が行われ、縄文晩期から弥生時代にかけての遺物が出ている。校区には延末とその近傍に橋詰、黒表、千代田(校区外)、また飯田の長越など多くの遺跡が連なる。

薬野(飯田) 飯田地内南部、船場川の東に、「薬塚」という小字がある。これが、『播磨鑑』に言う「薬野」の跡であろう。陰陽師芦屋道満の子孫道善が延徳二年(1490)に、薬野に薬草園を作る。三宅に仮家を建て、往来の人に薬を施したという。「三宅の施薬」として有名。『飾磨郡誌』は、飯田の古い訓み「いだ」は、「医田」の意ではとの説をあげている。

石ヶ坪(亀山) 亀山地内の小字。条里制の「一ヶ坪」の転訛であろう。他に「田家」等の小字がある。

力石(栗山) 栗山町の公民館内にある。かつて若者達が、力と業を競った大石である。大きさは、縦約55cm×横約35cm、刻字は「嘉永元年申年 振りさし 当早 平兵衛」、両手をこの石の長径にかけ、前後に振りながら差し挙げたので「振さし石」という名がある。栗山町の法円寺境内にも「嘉永七年寅年 当早 平兵衛 片手留」との刻字を持つ力石がある。片手で支えたものか。



力石



抽くみ地藏



夜啼地藏

夜啼地蔵 (安田) 靱田神社前に在り。『国衞巡行考証』によれば、応仁の頃、父を殺され母を連れ去られた乳呑み子が、母の尊んでいた一尺ばかりの地蔵に助けられ、乳を呑んだという。夜な夜な母を恋して泣きやまなかつたので、この名がある。乳の出ない婦人の参詣者が多かった。傍らには江戸時代の茶士・良故順誉関連の供養塔 (墓?) がある。

袖ぐみ地蔵 (手柄) 『播州名所巡覧図絵』には「袖扱地蔵」と、天正時代の古地図には「袖すり地蔵」と見える。『播陽うつ・物語』に見える「袖もぎ地蔵」もこれか。「袖ぐみ (汲み?) 地蔵」は、現地の現在の呼称。

靱山神社 (西延末) 祭神は、天照大神、八幡大神、春日大神。元禄十四年 (1701) 九月、姫路城主本多政武 (忠国) が、姫路城の裏鬼門を守るため、社領八石を寄進し、創建した。総社の社家が祭祀していた。米軍機の空襲により全焼。社宝の氏繁刀も焼失。現時の社殿は昭和41年の再建。靱山は伊和里十四丘の一つ、靱丘にあたる。



靱山神社

靱山打ちきてみれば武夫の手柄の山に弓張の月 (藤原貞国) [古跡便覧]

大年神社 (東延末) 旧村社。延末三町の氏神、節供祭。祭神は大年大神 (須佐之男命の御子神・穀物神) と君田大神、若年大神。昔、今より約200m南に社地があったが、延末村の豪農三輪嘉右衛門が、神を村より下手に祭るのは不敬と考え、享保八年 (1723)、現在地に遷したという。空襲により全焼。社宝の氏繁刀焼失。現時の社殿は昭和40年の再建。境内南西隅に手柄村第九代村長田中泰造翁の頌徳碑が在る。『飾磨郡誌』所載の歌に、



大年神社

長うねの爰大としの宮柱いく百世にかまつる神垣 (田中泰造翁頌徳碑)

靱田神社 (安田) 旧村社。安田の氏神。祭神は市杵島姫命。節供祭。地誌に曰く、「往昔、靱田川の氾濫で、桑原村 (西中島) から漂着した御神体を祀ったもの」。西中島には桑原、友田の小字がある。神社東の細い川を友田川と言った。天正以前、安田村が「石田村」と呼ばれていた頃、現東延末の字友田 (隣接地は字石田) 辺りに祀った。これを元宮 (「猫山」と呼ばれた所) という。村の飾磨街道筋への移転にともなって、南約200mの字堂の前に移り、さらに、昭和36年に、南西へ約300m、社殿を新築し現在地に遷座した。(一部推論)

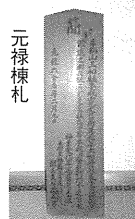


靱田神社

もろ人の願ふともたのしるしには満るもまこと神の瑞籬 (衣笠村氏) [播磨鑑]

飯田恵美酒神社 (飯田) 祭神は蛭子命。嘉吉元年 (1441) に、西宮神社より勧請。長年のうちに廃社同然となっていたものを、個人が自邸内に祀っていたが、明治12年に、孤山の地に、あらためて社殿を建てて祀ったもの。現時の社殿は昭和59年7月の新築再建。正式には、単に「恵美酒神社」という。

生矢神社 (手柄) 旧村社。飯田、亀山、手柄、栗山の四町の氏神。主祭神は、大己貴命 (大国主命) と須世理姫命。節供祭。「三輪明神」との称もあった。神功皇后の三韓出師の際、麻生山から放たれた、事始めの三本の矢のうちの 하나가、この地に落ちたところから「行箭社」、また地名三和から「三和社」とも言う。平清盛が巖島への往還に立ち寄って、大己貴命の霊夢に感じて、「生屋大明神」の神号を奉ったという。後、清盛十六世の孫関永重が飯田に住み、この地の代官となり、寛永九年 (1632)、社殿を再建した。正保三年 (1646)、藩主松平下総守は、社領二石四斗二升を寄進した。寛文九年 (1669) に社殿を修造し、また元禄六年 (1693)、本殿と幣殿を再建した時の棟札が残っている。天保七年 (1836) に、拝殿を再営した。本殿は出雲大社造りで、妻入り。かつては、総社の社家が祭祀をしていたもよう。明治27年8月以来、手柄小学校を境内地に預り、境内を運動場に提供していた。小学校は、昭和20年7月3日深夜の米軍機の空爆により全焼し、後に現地に移転した。昭和44年10月に、社殿を後方の山の中腹に移した。



元禄棟札



生矢神社

三和山のしるしは杉にあらね共 行やふりぬる神のみづがき (五代重頼) [播磨歌垣]

法専坊（東延末） 山号は双亀山。真宗大谷派。蓮如上人の高弟、^{しもつま}下間空善の開基。空善は蓮如上人の命により、播磨へ下り、英賀に本徳寺を創建し、晩年をこの寺に過ごした。播磨六坊の一つ。はじめ英賀にあったが、後、慶長年間に現地に移った。学制発布に従って明治6年(1873)、手柄小学校の前身「^{しきじゅつ}飾術学校」が法専坊を教場として発祥した。初代校長は、この寺の住職下間空澄師。空襲により、山門と鐘楼を残し焼失。昭和27年、堂宇を再建。



法専坊

浄円寺（安田） ^{とうこうざん}東岡山。真宗大谷派。『国衛巡行考証』は、臨川寺という寺をこの寺の前身とする。寛文八年(1668)の開基。本徳寺貞照院に従って、西派から東派へ転派。現時の堂宇は、宝暦六年(1756)の建立と伝わる。



三和寺の薬師如来坐像

法円寺（栗山） 一乗山。浄土真宗本願寺派。天正八年(1580)の開基。栗山の住人休右衛門（法名休意）が自邸を念仏道場としたもの。空襲により、山門と鐘楼を除き、焼失。現時の堂宇は、昭和57年の再建。

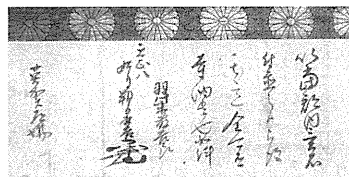
三和寺（手柄） 通称「さんないじ」。臨濟宗妙心寺派。薬師堂の本尊薬師如来及び十一面観音（ともに像高三尺余）は、^{えしん}恵心僧都源信の作と伝わるも、作風は鎌倉時代後期。山号の「医王山」は、薬師如来の別称「大医王仏」に由来すると思われる。延宝の頃、網干龍門寺の盤珪和尚の高弟祖竹の再興である。開山は盤珪。飾術学校火災焼失の後を受け、明治11年8月から同27年まで、「^{けんざん}勲山小学校(後の手柄小学校)」の教場となった。現時の本堂は、大正11年の再建。

勝久寺（亀山） 瑞龍山。浄土真宗本願寺派。元和五年(1619)、浄源の開基。平成7年、堂宇再建。檀家の多くは飯田にあり、寺は、西の方（飯田の方）を向いて建っている。

浄福寺（亀山） ^{まつおかざん}松岡山。浄土真宗本願寺派。蓮如上人常隨の弟子教賢の開基。四世浄秀の時、本徳寺二世実円に従って、三河から英賀に移る。後、羽柴秀吉の英賀攻めの際、泉州岸和田に難を避けていた本徳寺顕妙尼に代わって、秀吉を応接、寺領三百石の安堵を得た。本徳寺の英賀退転に従って、同じく亀山に移る。寛文の転派騒動の際、一時、正光寺と名乗るも、後、旧に復す。本堂は元文年間のもの。

長栄寺（亀山） 採水山。浄土真宗本願寺派。平清盛の嫡流、関三良忠永が寛正六年(1465)に出家し、法号を浄圓と称し、飯田村採水の地（遺称地不詳）に念仏道場を建てて住んだ。これを開基とする。慶応四年の亀山本徳寺の火災の際に類焼。また後に空襲により全焼。現時の本堂は、昭和42年頃の再建。

亀山本徳寺（亀山） ^{れいぎざん}霊亀山。浄土真宗本願寺派。「御坊さん」の名で親しまれている。かつては、別格別院、中本寺であった。蓮如上人の命で、下間空善が播州英賀の地に開創した念仏道場が基となり、明応二年(1493)に、蓮如上人より本尊が下付され、本徳寺と称した。開基は蓮如上人。初代住持は、蓮如上人の孫実玄。永正十二年(1515)に英賀御堂が完成した。天正八年の羽柴秀吉による英賀城陥落の後、秀吉より三百石の寺領の寄進を受け、天正十年(1582)、堂宇を亀山の地に遷された。本願寺の東西分立の際は、東派となったが、後、西派に転じた。元和五年(1619)、徳川秀忠より、四百三十九石余の寄進を受ける。寛文年間に、貞照院による大きな転派騒動があった。慶応四年(1868)に、火災により、本堂及び蓮如堂を焼失。西本願寺北集会所の建物を移築したのが現在の本堂（妻入りが珍しい）。柱には新撰組による刀傷が残る。霊亀高等学校、亀山女学校等の開設運営に関わり、また空襲による焼失後の手柄小学校を一時預っている。約30棟の堂塔のうち、本堂、大広間、経堂、庫裡の4棟が県の指定文化財、他15棟及び^{けいほんしやくしよく}絹本著色親鸞上人絵伝（四幅）、英賀御堂梵鐘が市の指定文化財となっている。



羽柴秀吉寺領宛行状

梵鐘は、永禄九年(1566)、三木宗大夫慶栄の寄進で、野里の鋳物師芥田五郎右衛門家久の作。



亀山本徳寺